

東京言語研究所・特別集中講義

<演題> : 「日本語存在表現の歴史」

<講師> : 金水敏〔大阪大学大学院文学研究科教授〕

<講義内容>

この講義内容の多くの部分は金水（2006）『日本語存在表現の歴史』（ひつじ書房）と重なっていますが、残りの部分は今回新しく付加した部分であり、またかつて述べたことを新しい視点から述べ直したところがあります。

講義 1 存在文・存在動詞の分類

存在文を、「空間的存在文」「限量的存在文」「リスト存在文」「所有文」等に分類することを提案し、これらの分類は存在動詞の分類（場所項を要求するか否か）と連動することを述べる。現代共通語の話者は、「いる（おる）」と「ある」をもっぱら主語の指示対象の有生性によって使い分けているが、一部の話者は限量的存在文・リスト存在文・所有文に限って有生物主語に対し「ある」の所有を許容するが、その許容度は話者の年齢・世代によって異なるようである。また、英語、中国語、韓国語、スペイン語等、他の外国語との対照も試みる（この講義は、意味論的・統語論的な分析が主となり、若干聞くのに骨が折れますが、できるだけ分かりやすくお話しします）。

講義 2 「いる（ゐる）」の歴史（上代～鎌倉）

「ゐる」（「いる」の古形）は元来は存在動詞とは言えず、移動可能な対象が一定の場所に静止・固着する意味の変化動詞であった。一方「あり」（「ある」のラ行変格活用形）は、主語の有生・無生、空間的・限量的を問わず用いられた。また「あり」の敬語形（尊敬語「おはす」謙讓語「はべり」等）も意味的には「あり」と同様の用法を持っていた。

講義 3 「いる」の歴史（室町～現代）

「いる」は室町時代後期までには有生物の存在を表すようになったが、最初は空間的存在文の一部に限定されていた。やがて、江戸時代までには、有生主語かつ空間的存在文の領域を占めるようになった。近代に入り、有生主語かつ限量的存在文の領域に「いる」が進入するようになり、現在はこの領域をほとんど「いる」が占めることとなって、空間的・限量的という区別が形態論的には効力を失った。

講義4 「ゐる」と「をり」の関係（上代～鎌倉）

「をり」（「おる」の古形）は、上代には「ゐる」の唯一の状態形（「あり」が膠着し、「ゐる」の結果状態を表す）であった。平安時代に入ると「ゐたり」という新しい状態形が登場し、「をり」の用例は減少した。さらに「をり」に特殊な評価的ニュアンスが加わることとなった。

講義5 「いる」と「おる」の関係（室町～現代）

現代共通語では、「おる」は「おります」（謙譲・丁寧語）、「おられる」（尊敬語）、「おり」「おらず」（中止形）に限って用いられるが、このような分布が近世における重層的なスタイルから流入していることを述べる。

講義6 地理的分布と歴史

現在、西日本の多くの方言では有生物の存在に「おる」を用い、東日本の多くの方言では「いる」を用いるが、この分布が、中央における歴史的変化とどのように関連するのかという問題について思考実験を試みる。併せて、一般的に語彙・意味が動的に変化する原理について考察する。